

# Ikkan Sanada

眞田一貫 | ギャラリスト

## 世界で活躍するギャラリスト・眞田一貫は いかにしてチームラボをトップにしたか

一流のギャラリストがいなければアーティストは育たない。チームラボを世界の舞台へと引き上げたのは、世界的な視野を持つ眞田一貫にほかならない。

text by Kiyomi Nakayama | illustration by Kei Meguro  
中山清美 = 文 目黒ケイ = イラストレーション



ギャラリスト——それは美術界の屋台骨的な存在である。美術商とも呼ばれる彼らだが、ギャラリーで作品を販売するだけではなく、アーティストを育てる役割も担っている。チームラボを“アーティスト”として育てたギャラリストは間違いなく眞田一貫、その人だ。眞田がシンガポールに構えるギャラリー「Ikkan Art」で初めてチームラボの作品を展示して以来、3大メガギャラリーのひとつでもある「PACE」での個展、さらには世界各地での展示開催など、眞田の活躍がチームラボの世界へのアプローチにおける重要なピースになっていることは言うまでもない。

「これまで海外のアートシーンで学んできたことを、チームラボのために使いたい。とても雑な表現になってしまいますが、20世紀の前半を代表するのがピカソ、20世紀の後半を代表するのがアンディ・ウォーホルだったとしたならば、21世紀の前半はチームラボ、そんなふうに評価されるようになったら本望だなと思ってずっと努力してきました」

そう語る眞田のギャラリストとしての始まりは、1971年に遡る。知識も経験もなかったが、パリにオープンしたばかりの日本の『ギャラリーためなが』の門を半ば強引に叩いた。

「学生運動のさなか、19歳のときに矢内原伊作の『ジャコメッティとともに』を読んで、衝撃を受け、パリの持つ空気に強く惹かれました。人々がパリの空気に触れたときに、国籍なんて関係なく、相互作用みたいなもので独創的なアートが生まれる。そういう魔力があると思った。どうにか工面した29万円を文字通り握りしめてシベリア鉄道に乗り、2週間かけてパリに着きました。到着した時にはすでに持ち金はゼロ。それでも、亡きジャコメッティのアトリエを訪れました。その瞬間がぼくのアート人生の、幕開けです」

「ギャラリーためなが・フランス」で絵を買ったり売ったりする仕事を経験し、ギャラリストとしての基礎を培った。1970年代末頃から、美術市場の中心は徐々にパリやロンドンから

「Ikkan Art」で初めてチームラボの作品を展示した「Experience Machine」。「世界はこんなにもやさしく、うつくしい」(紫舟+チームラボ)と「花と屍 剥落」によって、4面を使った360°作品の世界観を提示した。(2012年9月)



ニューヨークへと移行していったが、眞田もそうした流れを敏感に感じ取り渡米。1982年ニューヨークで「Ikkan Art」を立ち上げた。

### 日本アート界が抱えるジレンマ

「1989年頃、当時のお金で1兆円くらいの美術市場規模が日本にありました」

当手を振り返りながら、眞田は「ニューヨークに軸を置きながらも日本に国際的なアート市場を根付かせたいという強い思いがあった」と続ける。しかし、日本のアートフェアへ、リキテンスタインやウォーホルを発掘した伝説の画商レオ・カステリのコレクションを展覧した際に直面したのは、日本市場のいかんともしがたい現状だった。

「カステリは、心からアーティストをサポートしていたギャラリストの模範みたいな人でした。日本で国際的なアートフェアを根付かせようと考えていたぼくは自分の想いを語り、カステリはそれに呼応してくれて、扱っている作品を持って来日してくれた。ところが、晴海で実現

したものの買い手不在で1990年から2回しか開催できなかった。人々は入場券を買って、美術品を覗くだけ。海外のギャラリストたちは、日本に潜在するコレクターや美術館とのつながりを望んでいました。けれども日本の公立美術館は、美術品を売買する場になんか行くべきでない、学芸員たちの出張の許可さえ下りない。本物の作品を直に観ることができる機会と、それらの作品を扱っている画商との出会いがあるのに。それは信じられないことでした。全国の美術館の学芸員が、せめて大手を振って来場できるようにしたかった。けれども、残念ながら今日ですら同じようなことが起きています」

こうした問題に直面した眞田は、より一層日本のアートシーンに、自身が海外で培った知識や経験を役立てたいと考えるようになっていった。

### シンガポールで未開の地を開拓

日本のバブルが弾けてしばらくたち2000

年代に突入すると、アメリカでは多くの名作がオークションなどで出回り、大きな資本で市場が動いていくようになっていた。眞田は60歳を迎えたことを機に、30年間過ごしたニューヨークを去り、拠点をシンガポールに移す。

「アメリカでは大きな資本力がないと仕事ができない時代になっていたのです。悩んだ末に、シンガポール行きを選びました。きっかけはパルケット・コレクション展。ニューヨークに移住してから数年後、パルケットのディーターと知り合いました。前衛の作家に作品を制作してもらい、その作家の出版物をつくる。アーティストと出版社の、新しいコラボレーションでした。ぼくは、パルケットの扱った作家の作品を、片っ端から買っていました。そんなパルケットの25周年展を日本でも開催したかった。けれども、ぼくが持っているすべての作品を無料で貸し出すと伝えても、どこも開催してくれません。そこで、自腹で金沢21世紀美術館のスペースで開催することにした



初展示から半年後、「Ikkan Art」で「憑依する箱」を展示。フルハイビジョンの5倍の解像度である5Kにより、超微細なディテールまで描いた映像作品として表現した。(2013年3月~4月)

のです。そのとき観に来ていたシンガポールのSTPIギャラリーのディレクターが展示を大変気に入ってくれて、シンガポールでも展示したいと熱心に口説かれました。パルケットがなかったら、シンガポールには行かなかったでしょうね」

眞田がシンガポールに渡ったころは、まだ国立美術館（ナショナルギャラリー）も画廊街ギルマンバラックスも存在しなかった。だからこそ、一から行う市場開拓に意味があった。新たに立ち上げた「Ikkan Art」は、徐々に芸術関係者の中でも注目のギャラリーに成長していった。

「SAM（シンガポールアートミュージアム）の館長タン・ブーンヒュイ氏が熱く語ってくれたことを覚えています。シンガポールにはまだ国際水準のアートシーンはないけれど、いつか必ずシンガポールにそれをつくりだしたい、だからシンガポールに来てほしいと。そのときぼくはニューヨークでもがいているより

も、シンガポールでなら意味あることができるかもしれないと思ったんです」

ニューヨークから、シンガポールへ——この決断が、のちにチームラボとの邂逅へとつながっていく。

#### “いま”を探してチームラボに出会う

眞田は「シンガポールでは自分が楽しめる展示をやっていこう」と決意し、これまで集めてきた作品をもとに、グループ展のようなものができないかと動き始める。コレクションリストを眺め、1990年代に買っていたデジタルアーティストの作品をピックアップしていく中で、ふと作品群が90年代で終わっていることに気づいた。

「“いま”の作品がなかったんです。“いま”を展示しないことにはどうにもならない。悩んでいたとき、ちょうど1年前に大阪の堂島リバービエンナーレで観た『百年海図巻』という作品を思い出したんです。カタログを引っ張り出し、その作家名を見ると『チームラボ』と書かれていました。知らない作家だけれども、面白いのではないかという直感が働きました。偶然というのは不思議なものです。そのころ、ギャラリーに送られてきた案内の中に、東京の『ミヅマアートギャラリー』からの個展案内があり、そこにチームラボと書いてあったんです。人の縁というのは、本当に面白い。個展のオープンに合わせて東京に行き、ギャラリーを訪れると『世界はこんなにもやさしく、うつくしい』が展示されていました。そこで、三浦末雄さんにチームラボの猪子寿之さんを紹介してもらいました。その場で猪子さんに『シンガポールで展示をやりませんか?』と聞いたときのことをよく覚えています。ひと通り自分

の展示のことを説明し終わると、即決でOKの回答が返ってきました。それがチームラボとの長い付き合いのスタートでした」

こうして2012年9月、「Ikkan Art」で初めてチームラボの作品を展示した「Experience Machine展」が開催された。グループ展という体裁ではあったが、実際はチームラボの個展のような構成になり、多くのシンガポールのアート関係者の目に留まることとなった。前述のタン・ブーンヒュイ氏の尽力もあり、2013年10月から2014年2月まで開催されたシンガポールビエンナーレへのチームラボの参加も決定。2014年1月にはアートフェア「Art Stage Singapore」でチームラボの作品『Nirvana』を展示したところ、初日に完売するほど評判になった。こうして眞田とチームラボの連携は、アートシーンにさまざまな影響を及ぼしていくことになる。

#### 高級なエンターテインメントでは終わらせない

「2014年末から日本科学未来館で展示されたチームラボ 踊る!アート展と、学ぶ!未来の遊園地が、ぼくにとってもうひとつの始まりだったように思います。教育向けの作品群とアート作品群を同じ会場で展示するという発想がとても新鮮でした。けれども、日本では誰にもそのすごさが理解されていなかったようにも感じていました」

眞田はチームラボポータルについて、その空間の裏に秘めた想い、コンセプトを訴え続けた。それがアートにとっては重要だからだということを知っているからだ。眞田はチームラボをアートとして広めることにこだわりを見せる。

## “アーティストとしてトップになるには、自分たちのアイデンティティを変えるべきだ”

「想いやコンセプトが伝わらないと、単なる高級なエンターテインメントになってしまう。それは新しい表現というものに対して、繰り返されてきた歴史ともいえます。初めてドガが写真を撮った時もそうでした。19世紀から20世紀にかけては『カメラで撮影した複製できるものなんてアートではない』と評されてきましたからね。映画でもインスタレーションやパフォーマンスでも、新しい表現が出てきた時には必ず起きる現象です。だからこそ、研究者や美術史家、評論家、美術館、ギャラリーなどアート関係者たちを取り込んで、大きな流れをつくっていかないといけないのです。それが、自分の役目だと思っています」

チームラボをアートとしてさらに押し上げる

べく、眞田が打った次の一手。それはグローバルのメガギャラリー「PACE」への進出だった。

### 世界3大メガギャラリー「PACE」での初出展

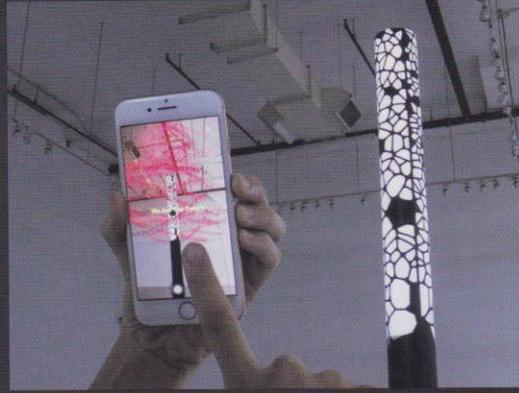
アート界での活動には美術館やコレクターとのつながりが何より重要になってくる。作品をつくり続け、それがギャラリーの目に留まり、コレクターや美術館に届く。複数のギャラリーでの取り扱いを経て、世界トップのギャラリーで取り扱われるようになることを目指す。しかし、眞田は考えた。「そうしたすぐろくゲームでは、自分の年齢を考えたときにとてもじゃないけれども間に合わない」と。そこで、これ

まで培った海外での経験を生かすことを思いつく。

「もう直接メガギャラリーのPACEに交渉することにしました。PACEで付き合いがあったのは、アーニー・グリムシャーとその息子のマーク・グリムシャー。そして、ミスターアジアと呼ばれていたアジア担当のピーター・ボリス。ピーターはニューヨーク時代からの大親友です。台北市立美術館でバルケット展をしたのは、2013年5月から8月でした。バルケットのコラボレーションであることを拡大解釈して『バルケット+5』という形にして、チームラボと他に4グループの展示を加えました。そこにピーターを呼んで、チームラボを見てもらいました」



「Ikkan Art」で開催された「流れる光、移ろう光景」展にて、チームラボは、新作「花と人、コントロールできないけれども、共に生きる - Dark」を発表。アーティストトウクに猪子寿之が参加している。(2015年1月~2月)



2018年の展覧会「Continuous Life and Death at the Now of Eternity」では、表題作品と、スマートフォンのカメラを通して作品が変化する「Message Pillar」も出展。デジタルアートの新たな可能性を提示した。(2018年1月～2月)

翌年1月の「Art Stage Singapore」にも足を運んだピーターは、「Ikkan Art」のブースの前でチームラボの作品が売れ続けているのを目の当たりにした。こうしてチームラボの熱烈なファンになった彼は、最大級のアートフェアとして名高いアート・バーゼルにチームラボの作品を出展したいと、交渉を開始する。しかし、アート・バーゼルは聞いたこともないチームラボの作品の展示を拒否。悲しい結果となったが、「そのことがパワーをくれたように思います」と眞田は振り返る。

「PACEが推ししながら却下された作品なら、バーゼルではなくPACEで個展をしてやろうと。けれども、PACEのスケジュールは3年先まで埋まっている。いきなり新人を割り込ませて展示するのは難しいなら、バカンス中で人が入らないといわれているサマーショーのタイミングでやれば良いと思い立ちました」

当初は反対意見も多く、ギャラリー側の躊躇している雰囲気も感じたというが、ピーターが「この展示をキャンセルしたらPACEを辞める」と覚悟を表明。こうした熱意が実を結び、ついに2014年ニューヨークのチェルシーにあるPACEのギャラリーでチームラボの初展示がスタートした。蓋を開ければサマーショーにもかかわらずPACEの歴史に残るほどの来場者が訪れるという結果を残し、シリコンバレー・メンローパークのPACE特設会場での長期的な大個展につながっていった。

※

眞田はチームラボ・猪子に、「何を目指しているのか?」と聞いたことがあるという。その時猪子から返ってきた答えは、「どんな分野なのかわからないけど、とにかく世界のトップに行きたい」というものだった。

「当時、チームラボは“ウルトラテクノロジスト集団”と自称していたけれども、テクノロジスト集団でトップになっても、新しいテクノロジーに負けてしまうと思ったんです。だけど、アーティストとしてトップになれたならばどんなことだってできる。シャガールがパリのオペラ座の天井画を描いたように。だから『とにかく世界のトップに行きたい』に対する答えはひとつしかありません。アーティストとしてトップになるしかない。まずは、自分たちのアイデンティティを変えるべきだと強く伝えました。チームラボは“アートコレクティブ”になるべきであると。自分たちをどう呼ぶかによって世界は変わりますから」

#### 眞田の夢は、まだ終わらない

眞田の熱い気持ちに鼓舞され、チームラボはその後も定期的にPACEで個展を行うほか、世界のアートシーンへ歩みを止めずさまざまな挑戦を続けている。2022年6月20日、スイス・ジュネーヴのジュネーヴ大劇場(Grand Théâtre de Genève)で上演されたジャコモ・プッチーニの遺作オペラ『トゥーランドット』のセノグラフィ―と舞台デザインを担当したことも、そのひとつだ。プランニングに5年の

歳月を費やしたが、約2時間半のオペラが終わったあとに巻き起こったスタンディングオペレーションがプロジェクトの成功を物語っていた。「バリ時代から、ずっと好きでずっと夢だったオペラを、チームラボが実現したこと。その舞台を観られたことは、ぼくの人生の夢の実現でした」

そう語る眞田だが、夢はここで終わりではない。まだまだ日本のアートシーンでやりたいことが残っている。

「ぼくは72歳になりました。人生の半分以上を海外で過ごしてきましたが、残りの人生は日本の美術市場の活性化のために何かをしたい。チームラボはもちろんのこと、日本にはポテンシャルのあるアーティストもコレクターもまだまだいます。世界でもトップ5に入るアートシーンに育つはずだと信じています。けれども実際は、世界におけるアート市場のなかでは圏外にいるような状態です。世界中のアート関係者たちが、熱い想いを持って日本にやってきたとき、世界の仲間入りができるような状態にしておかないといけない。ぼくはいま、日本をアート先進国にするために、自分は生かされてきたと感じているんです」<sup>①</sup>

#### Ikkan Sanada

眞田一貫●1950年生まれ。岡山市の高校卒業後、慶應義塾大学文学部に入学するが、学生運動の影響で大学の授業がない時期が続いたことから中途退学。フランス語を習得後、1971年6月に横浜港から出国し、ナホトカ航路、シベリア鉄道を経て陸路パリに渡航。20歳の時パリにて美術業界に入る。以来、欧米の近代現代アートを中心に優れた美術作品の紹介・取引に豊富な実績を有する。